

大学生の専門的文章の読解における未知語の意味の推測

○藤木大介¹・山本和弘²(非会員)・中村諭美子²(非会員)
 (¹愛知教育大学教育学部, ²愛知教育大学大学院教育学研究科)
 キーワード: 専門的文章, 未知語, 意味推測

Inferring of Unknown Words in Reading Technical Texts

Daisuke FUJIKI¹, Kazuhiro, Yamamoto², and Yumiko, Nakamura²

(¹Faculty of Education, Aichi University of Education, ²Graduate School of Education, Aichi University of Education)

Key words: technical text, unknown word, inferring word meaning

高等教育での学びには専門的文章の読解が必要である。学生は講義や演習, 卒業研究等のために概論書や専門書, 学術論文等を読み解くことが求められる。しかし, 未知な用語が含まれるため, 読解が困難となることがある。

未知語の意味の推測についての検討が行われているのは主に第二言語習得に関する領域である。これまでの研究を概観した徳田(2006)等によれば, 推測に利用される情報は大きく分けて, 未知語そのものの持つ情報, 文章内の文脈情報, 文章外の世界知識であり, de Bot, Paribakht, & Wesche (1997)は主に文レベルの文法的知識や語の形態論的知識, 句読法的情報が利用されることを示している。一方, 母語の読解に関する研究として Dubin & Olshtain (1993)は, 文章中のいくつかの語をブランクに換え, そこに母語話者がどのような推論をしてどのような語を補充するか検証した。その結果, ブランクの前後や文全体等から十分な情報を得られた場合は正しい語や類義語で穴埋めできることが示された。

このように, 未知語の意味の推測は, 第二言語では比較的局所的な情報が多く用いられ, 母語では文脈の整合性が鍵となると言える。しかし, 専門的文章はこれらとは異なる特徴も有している。例えば, 第二言語の未知語の多くは母語に意味的に対応する語彙があるのに対し, 専門的文章の未知語の多くは新たな概念を表す語であり, 言い換えが困難である。そのため, 第二言語習得研究で示されたように, 語そのものの持つ情報等, 局所的な情報を用いた意味の推測が多く用いられるとは限らない。また, 文章の質によって未知語の意味の推測の際にとり得る方法は変化し, 科学的文章等, 専門性の高い文章は一般知識の利用がしにくい(徳田, 2006)。そのため, 世界知識を利用した未知語の意味の推測はほとんど行われなかもしれない。これらのことを検討するため, 本研究では発話思考法により大学生の概論書の読解過程を観察し, 未知語の意味をどのように推測しているかを検討する。

方法

参加者 心理学専攻の大学生, 大学院生 11 名であった。

材料 大学の講義等で一般的に用いられる概論書(多鹿, 2008)から「場所学習と認知地図」の箇所を用い, A4 用紙 1 枚に印刷した。なお, この箇所はラットの迷路学習に関するもので, ハルの刺激-反応の連合による説明と, それに対するトールマンの認知地図による説明を紹介する内容であった。

手続き 発話思考法に関するものとして, 頭の中の状態をモニターし, 実況中継するつもりで説明しながら読むように等教示した。また, 文章の内容を把握できているかテストをするので, 十分に理解できるまで自由に読むよう求めた。

読解後, 文章を印刷した用紙を回収し, 理解度を測る課題を行った。これは, 文章そのものから形成された表象の状態を査定するための 100 語の要約課題と, 文章と既有知識とをあわせて形成された整合的な表象の状態を査定するための推論課題とからなっていた。推論課題では, 迷路学習後のラットに対してスタート地点を変更した場合どのような行動をとると考えられるかその根拠もあわせて尋ねた。

分析の観点 読解の様子を録画したもとのから, 語の意味を

とりづらそうにしている行動(読みが詰まる, 伸ばして読む等)が見られた語を未知語とした。これらの語についてどのような方略で意味を推測していたかを, (1)読み飛ばし:発話が生成されなかった場合, (2)未知語からの推測:心的辞書に記載されている情報を用いての推測(e.g. 複合語の要素となった語に関する知識の組み合わせから推測), (3)文脈情報からの推測:文章中の情報を用いての推測, (4)世界知識からの推測:文章外の情報を用いての推測, という基準で分類した。文章の理解度は, 要約課題については, ハルに対するトールマンの優位性に言及している場合や, トールマンの考えが認知心理学の勃興につながったことに触れている場合を正答(6名)とした。推論課題については, トールマンの認知地図の考えに基づく回答を正答(6名)とした。

結果と考察

理解課題の正誤を分けた要因を検討するため, 各群の学年(修士1年は5年と換算), 未知語数, 及び各群の方略(上記(1)~(4))の個人内での使用率, それぞれの平均を集計した(表1)。

全体として, 初読時は読み飛ばしが多く, 再読時以降に文脈情報からの推測を行っていることがうかがえた。また, 要約課題では正答群の方が未知語数が少なかった。一方, 推論課題では正答群の方が学年平均が高く, さらに初読時は読み飛ばしが多いのに対して未知語からの推測は少なく, 再読時以降は読み飛ばしが少ないのに対して文脈からの推測が多かった。以上の結果を考え合わせると, 未知語数が少ない場合, 文章の表層的な表現をまとめることが容易なため, 文脈情報や未知語からの情報を用いた推測が可能になり, 要約的表象の形成が可能になったと考えられる。一方, 学年があがると読解力が上がったり知識量が増えたりするため, 一旦未知語は読み飛ばし, 再読時以降に文脈情報を用いて文章全体としての整合的な表象の形成が可能になったと考えられる。

表1 理解課題の評価毎の学年, 未知語数, 及び未知語の意味の推測で用いた方略の使用回数の百分率の平均

課題	群	学年	未知語数				再読時以降				
			(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	
要約	正	2.7	24.2	61.3	11.0	26.2	1.4	9.7	9.9	76.8	3.6
	誤	3.0	30.6	58.4	13.1	23.0	5.5	11.5	6.0	79.9	2.6
推論	正	3.7	27.0	63.1	9.0	24.1	3.8	6.5	7.8	82.1	3.6
	誤	1.8	27.2	56.3	15.4	25.6	2.7	15.4	8.5	73.5	2.6

引用文献

- de Bot, K., Paribakht, T.S., & Wesche, B.M. (1997). Toward a lexical processing model for the study of second language vocabulary acquisition: Evidence from ESL reading. *Studies in second language acquisition*, 19, 309-329.
- Dubin, B., & Olshtain, E. (1993). Predicting word meanings from contextual clues: Evidence from L1 readers. In T. Huckin, M. Haynes, & J. Coody (Eds.) *Second language reading and vocabulary learning*. Norwood, NJ: Ablex. pp.181-202.
- 多鹿秀継(編著) 学習心理学の最先端: 学びのしくみを科学する あいり出版
- 徳田 恵 (2006). 読解における未知語の意味推測と語彙学習 言語文化と日本語教育, 増刊特集号(第二言語習得・教育の研究最前線 2006年版), 10-30.

本研究は平成 24 年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)) (課題番号: 20403595, 代表者: 沖林洋平)による助成を受けて行った。また, 本研究の実施にあたり, 山川真由氏(愛知教育大学教育学部)の協力を得た。